

# AFEE にみるアメリカ制度主義経済学

高 橋 真<sup>1</sup>

American Institutional Economics from the View of AFEE

Shin Takahashi

現代のアメリカ制度主義経済学の展開を探る上で、アメリカ制度主義者の学会である AFEE (進化経済学会) は重要な役割を担っている。AFEE は、アメリカ制度主義経済学の発展を目的に設立されたが、その後新古典派への傾斜とそれに伴う新たな制度主義の学会設立、そして AFEE 自体の制度主義への回帰などを経て現在に至っている。AFEE の動向は、アメリカ制度主義を取り巻く状況と連動するとともに、さらには経済学界の新たな動きと大きく関わっている。アメリカ制度主義経済学の方向性は、AFEE の中に見出すことができる。

キーワード：制度 AFEE AFIT アメリカ制度主義経済学

## I 現代制度経済学の分岐

1960 年代以降、ダグラス・ノース (Douglass North)、ロナルド・コース (Ronald Coase) そしてオリバー・E・ウィリアムソン (Oliver E. Williamson) などによって「新しい経済史」(New Economic History) や「取引費用経済学」(Transaction Cost Economics) や「法と経済学」(Law and Economics) などの新たな経済学の試みがなされてきた。このような試みは、制度 (institutions) のもつ経済的意味とその役割を新古典派的手法から解明しようとするものであり、「新しい制度経済学」(New Institutional Economics) と称された。

周知のように、新しい制度経済学の登場以前には、ソースティン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) に始まる「アメリカ制度主義経済学」(American Institutional Economics)<sup>2</sup> は、「制度に関する経済学」または「制度重視の経済学」として認知されて、その理論内容はその独自性とともに評価されてきた。

しかし、新しい制度経済学の登場によって、アメリカ制度主義経済学に対する「制度に関する経済学」または「制度重視の経済学」という評価は分かれることになってきたといえる。すなわち、新古典派・主流派経済学においては与件として、あるいは理論の前提として位置づけ

---

2010 年 9 月 15 日受理

1 尚絅学院大学教授

2 19 世紀後半以降に、ヴェブレンやジョン・R・コモンス (John R. Commons) やウェズレー・C・ミッチェル (Wesley C. Mitchell) などによってアメリカで成立した反主流の経済学である。新しい制度経済学 (NIE) が登場してからは、アメリカ制度主義経済学は「旧制度主義経済学」(Old Institutional Economics ; OIE) または「オリジナル制度主義経済学」(Original Institutional Economics ; OIE) とも呼ばれることが多くなった。

られてきた制度が注目され、経済理論の中心に踊り出ること、「制度に関する経済学」の呼称は、もはやアメリカ制度主義経済学固有のものとはいえない状況となった。

事実、現在では、制度を名乗る多種多様な経済学が登場し、その理論内容も多種多様なものとなっている。

その一例として、ベルナル・シャバンス (Bernard Chavance)<sup>3</sup> は、制度経済学 (Institutional Economics) として、前述したアメリカ制度主義経済学と新しい制度経済学の他にも、古くはグスタフ・フォン・シュモラー (Gustav von Schumoller) とドイツ歴史学派 (Historical School)、オーストリア学派とオルドー自由主義 (Ordoliberalism)、レギュラシオン理論 (Regulation theory)、コンバンション経済学 (Economics of Conventions)、そしてジェフリー・ホジソン (Geoffrey Hodgson) の現代ヨーロッパ制度主義を挙げている。

現在、「制度に関する経済学」または「制度重視の経済学」という意味での制度経済学はその広がりをもっと拡大しているといえる。

本稿では、このような制度経済学の分岐といえる現状の中で、「制度に関する経済学」または「制度重視の経済学」としての地位を現在まで保持してきているアメリカ制度主義経済学が、第2次世界大戦後に設立・組織した「進化経済学会」<sup>4</sup> (The Association for Evolutionary Economics, 略称はAFEEであり、以下ではAFEEと表記する) の展開を探ることによって、戦後のアメリカ制度主義経済学の実態を明らかにするとともに、制度経済学の分岐という現状におけるアメリカ制度主義経済学の存在意義の解明を試みるものである。

## II アメリカ制度主義経済学とAFEEの設立

アラン・G・グルーチャー (Allan G. Gruchy) やクラレンス・E・エアーズ (Clarence E. Ayres)、そしてジョン・ギャムズ (John Gambs) といったアメリカ制度主義経済学者の間で、1958年にアメリカ経済学会 (American Economic Association: 略称AEA) の年次総会が開かれたワシントンD.C.のワードマン・パーク・ホテル (Wardman Park Hotel) で、アメリカ経済学会から独立した新たな学会設立の話がもちあがった。その会合はグルーチャーの招請によるものであった。

彼らが新たなアメリカ制度主義経済学の学会設立を望み行動した理由は、以下の2点である。第1に、アメリカ経済学会の運動の方向性への失望と不満である。そして第2に、アメリカ経済学会のプログラムの中にアメリカ制度主義経済学者の主張が反映されることの難しさ、であった。

事実、1885年のアメリカ経済学会設立とその後の過程では、ヴェブレンやコモنزやミッチェル、そしてジョン・モーリス・スラーク (John Maurice Clark) などのアメリカ制度主義経済学者は大きな役割を担ってきたし、ヴェブレンを除くコモنز、ミッチェル、そしてJ・M・クラークはアメリカ経済学会会長を務めてきた。

しかし、特に第2次世界大戦後のアメリカ経済学会は、新古典派経済学者やケインズ派経済

3 Chavance [5]

4 日本にも「進化経済学会」(The Japan Association for Evolutionary Economics: 略称はJAFEE)は存在するが、本稿で扱っているアメリカで設立された「進化経済学会」(AFEE)とは別の組織である。

学者が多数派となり、アメリカ制度主義経済学者の影響力は相対的に弱まっていった。

1958年のワードマン・パーク・ホテルでの初会合から1965年のAFEE設立までに関わったアメリカ制度主義経済学者は、グルーチャーら前述した3名の他に、ジョセフ・ドーフマン (Joseph Dorfman)、デイビット・ハミルトン (David Hamilton)、ルイス・ジャンカー (Louis Junker)、J・ファグ・フォスター (J. Fagg Foster)、ハリー・トレビング (Harry Trebing)、そしてジェームス・ストリート (James Street) などがある。彼らは、「ワードマン・グループ」と称され、戦後のアメリカ制度主義経済学の展開において、主導的な活躍をみせた。

1965年に、アメリカ制度主義経済学者の学会はヴェブレンの進化経済学 (Evolutionary Economics) から名前を採り、「進化経済学会」と命名されて正式に発足した。<sup>5</sup>そして、初代会長にエアーズ、第2代会長にギャムズ、そして第3代会長にグルーチャーがそれぞれ就任した。なお、AFEEの歴代会長名は、本文末の〔表1〕に示してある。

ギャムズは、AFEEのメンバーの「・・・幾人かは、ヴェブレニアン (ヴェブレン主義者) と呼ばれること - 私を含めて - を好んでいる。アラン (グルーチャー) はまた、ヴェブレニアンである。・・・われわれはまた、両者ともに、エアーズの崇拝者であり、それゆえに、またデューイ (Dewey) の崇拝者でもある。」<sup>6</sup>と述べ、戦後のアメリカ制度主義経済学が初代会長のエアーズとアメリカのプラグマティズム哲学 (道具主義哲学) 者のジョン・デューイとの影響下にあることを示唆している。

また、AFEEは学会誌 *The Journal of Economic Issues* (略称は、JEI) を、1967年以降年4回発行している。ポール・D・ブッシュ (Paul D. Bush) によれば、「制度主義者による運動の歴史の初めの期間に、JEIは制度主義の方法論と研究プログラムの一貫した発展のための継続したフォーラムを準備した」<sup>7</sup>のである。

### Ⅲ AFEEの拡張

1965年のAFEEの設立以後、AFEE会員と学会誌JEIへの投稿論文は、アメリカ制度主義経済学だけにとどまらず、新古典派経済学などの経済学諸学派へと拡大していった。そして、それが顕著に現れたのは、ウォーレン・J・サミュエルズ (Warren J. Samuels) が学会誌JEIの編集責任者を務めた1971年から1981年までの期間であった。サミュエルズは、この学会誌JEIが幅広い評価を受けることを願って、アメリカ制度主義の立場にたった研究にこだわることなく、新古典派経済学やその他の学派の研究成果をも積極的にJEIに掲載した。サミュエルズにとって、アメリカ制度主義経済学分野に投稿論文が限定されることは、JEIへの投稿論文数の減少を意味し、編集者にとってこのことは悩みの種であった。<sup>8</sup>

さらに、このAFEE会員とJEIへの投稿論文におけるアメリカ制度主義からの拡張は、サミュエルズ自身の経済学的立場も微妙に関係していたものと推察できる。AFEE設立に貢献したエアーズやグルーチャーやギャムズの経済学研究が、ヴェブレン以後のアメリカ制度主義の研究

5 Gambs [6] p.26 - 27. この学会には、後に会長を務めるウェンデル・ゴードン (Wendell Gordon) やモリス・コーブランド (Morris Copeland) などのアメリカ制度主義経済学者たちも加わった。

6 Gambs [6] p.27引用文中の ( ) は、筆者が補足したものである。

7 Bush [2] p.323.

8 Samuels [16] pp.315 - 316.

成果を色濃く反映してきているのとは対照的に、サミュエルズの経済学研究にはアメリカ制度主義的色彩を感じさせる研究成果はあまり見られない。サミュエルズは、「少なくとも、われわれすべてが、多少なりとも経済学者としては新古典派経済学者である」<sup>9</sup> という立場を明確にしている。さらに、サミュエルズ自身の経済学的立場は、アメリカ制度主義経済学と新古典派経済学との折衷経済学であり、サミュエルズは「新古典派と制度主義経済学とは、相互に排他的というよりも、大いに補完的であると信じている」<sup>10</sup> のである。

このような AFEE の状況は、AFEE の設立者のひとりグルーチャーにとって不本意かつ不満なものであった。1973 年、グルーチャーとギャンズは、これまでの AFEE の目的を「経済学の学際的研究の促進」から「非マルクス主義経済学からの批判」という形に修正しようと規約改正の提案を行った。しかし、その提案は通ることはなく、彼ら 2 人はこの AFEE を脱会することとなった。<sup>11</sup>

グルーチャーとギャンズが主張した「非マルクス主義からの批判」という規約改正案は、「批判経済学としての制度主義の学会」という立場の明確化と「学際的研究の促進」という名称によって集まったアメリカ制度主義以外の様々な経済学派（経済学アプローチ）を排除することを意図したものといえる。事実、AFEE の設立の目的は、ヴェブレンやコモンスなどの「主流の制度主義」(mainstream institutionalism)<sup>12</sup> の影響力を拡大することにあっただけにもかかわらず、AFEE の現状はそのような設立当初の目的を見失ったものとして、グルーチャーには写っていた。

グルーチャーは AFEE に対して、次のような評価を下している。すなわち、「AFEE は、理論分析と経済政策のいずれに関しても、ある明快なイメージまたは影響力を発展させることができなかったため、理論経済学と応用経済学における趨勢に対して、多大な影響力をもつことに失敗した」<sup>13</sup> と。

このグルーチャーの評価は、まさにヴェブレン以後の「主流の制度主義」の経済学研究とは異なり、新古典派経済学をも巻き込んだ「新しい制度理論の一般化」を模索したサミュエルズの方針に対する批判と解することができる。

さらにギャンズは、前述した規約改正に関連して、次のような認識を示している。「思いつかかもしれないが、考えられるところでは、AFEE といくつかの他の一般的な経済学会との間の唯一の重大な違いは、学際的であるということであった。しかし今日、ほとんどすべての経済学者は学際的であり、また（学際的という）その言葉は、ロビンズが子どもだった頃に人びとに衝撃を与えたのと同じようには、今日、人びとに衝撃を与えない」<sup>14</sup> と。

このようなグルーチャーとギャンズによる AFEE に対する評価は、新たな「アメリカ制度主義者の学会」の設立へと向かうことになったのである。

9 Samuels [16] p.316.

10 Samuels [16] p.318.

11 Gambs [6] p.30.

12 グルーチャーは、ヴェブレンやコモンスやミッチェル、さらにはエアーズやジョン・K・ガルブレイス (John K. Galbraith) など傑出したアメリカ制度主義経済学者たちを「主流の制度主義」と呼び、当時の AFEE 会員たちと区別していた。Gruchy [8]

13 Gruchy [8] p.272.

14 Gambs [6] pp.28-29. 引用文中の ( ) は、筆者が補足したものである。

### Ⅲ AFEE から AFIT、そして AFEE へ

前述したような AFEE の状況を受けて、アメリカ制度主義者のための新たな学会設立の動きが見られた。1979 年 4 月、ネバダ州で開かれた「西部社会科学学会」(the Western Social Science Association) 第 21 回年次総会で、正式に「制度主義思想学会」(The Association for Institutional Thought；略称 AFIT、以下 AFIT と表記する。)が設立された。

この学会の設立理由のひとつは、AFEE が「アメリカ制度主義者の学会」という設立当初の目的に対するグルーチャーなどのアメリカ制度主義経済学者たちの不満であり、その不満が新たな「アメリカ制度主義者の学会」の設立へと向かったのである。もうひとつの理由は「西部社会科学学会」において毎年行われてきたアメリカ制度主義者の会合を公式な学会とすることであった。<sup>15</sup>

AFIT の声明は、「学会の目的および目標は、社会の相互連関研究のための基礎としてのソースティン・ヴェブレン、ジョン・デューイ、クラレンス・エアーズ、ジョン・コモنز、ウェズレー・ミッチェル、そしてその他の人々の貢献を拡張し修正する中で、制度主義思想の発展を促進し育成させるべきもの」<sup>16</sup> というものである。このように、AFIT はその方向性を AFEE よりもより厳格にアメリカ制度主義経済学に絞り込んだものとなっている。

AFIT のメンバーは、グルーチャーやギャムズ、そしてエアーズなどの AFEE 設立当時の関係者が中心であったが、その中核を担ったのはテキサス大学でのエアーズの弟子のデイビット・ハミルトン、ウェンデル・ゴードンや J・ファグ・フォスター、それにデンバー大学でのフォスターの教え子のルイス・ユンカー、マーク・R・トゥール (Marc R. Tool)、ポール・D・ブッシュなどである。AFIT 設立メンバーの多くが AFEE のメンバーであるという点では、「制度主義思想学会 (AFIT) は、ソースティン・ヴェブレン、ジョン・デューイ、クラレンス・エアーズ、ジョン・コモنز、ウェズレー・ミッチェル、そしてその他の人々の研究業績の拡張と修正の中で、制度主義思想の発展を助長・促進するために設けられた組織である。……制度主義思想とは、科学と社会についての全体論的な思考方法である。それは、哲学的な思考と経済学的な思考のより広いスペクトラムから進化されたものであり、真に、社会科学への学際的なアプローチである。」<sup>17</sup> といえる。

AFIT の初代会長には、トゥールが就任し、学会誌 *The Review of Institutional Thought* はブッシュによって編集・発行された。<sup>18</sup>

もちろん、多くのアメリカ制度主義経済学者は、AFEE のメンバーであり、AFIT のメンバーでもある。前述したように、AFEE の拡張は、ポスト・ケインジアンや新古典派経済学者などをも包含する形となり、「アメリカ制度主義者の学会」としての色彩が薄れていったのは確かである。

このような AFEE の状況に対して、「アメリカ制度主義者の学会」をもう一度確立するために、すなわち、グルーチャー、ギャムズ、そしてエアーズ等 AFEE 設立者の期待を込めて再度

---

15 Sturgeon [17] p.40

16 Ranson [15] p.522.

17 Sturgeon [17] p.40.

18 学会誌 *The Review of Institutional Thought* は、1981 年に第 1 巻、1982 年に第 2 巻、1986 年に第 3 巻が発行された。それ以後は、発行されていない。



設立された学会が、AFITであったといえる。<sup>19</sup>

AFIT 設立の後、AFIT の初代会長を務めたマーク・R・トゥールが1982年から1991年にかけて AFEE の学会誌 JEI の編集責任者に着任した。トゥールの編集責任者就任は、AFEE および JEI にとって、アメリカ制度主義経済学への回帰を象徴する出来事となった。すなわち、トゥールはそれまで編集責任者であったサミュエルズのような拡張主義・折衷主義をやめ、AFEE の独自性をヴェブレン以来の「アメリカ制度主義」の伝統に求め、アメリカ制度主義経済学独自の研究をより深めることに重点を置いて活動した。トゥールは、1987 年発行の *The Journal of Economic Issues* の第 3 号を『進化経済学Ⅰ：制度主義思想の基礎』(*Evolutionary Economics I: Foundations of Institutional Thought*) とし、そして第 4 号を『進化経済学Ⅱ：制度理論と政策』(*Evolutionary Economics II: Institutional Theory and Policy*) として発行し、AFEE の総力を結集したアメリカ制度主義経済学の研究書とした。<sup>20</sup> この 2 冊の研究書の発行は、AFEE が「アメリカ制度主義経済学の学会」であることをあらためて表明した証しとして、評価されることとなった。

この間、AFEE と AFIT の関係は、その構成メンバーがほぼ同じメンバーであることから、緊密な関係を保っているといえる。フィリップ・A・オ・ハラ (Phillip A. O'Hara) の言葉を借りれば、両者は「姉妹関係にある組織」である。<sup>21</sup>

#### Ⅳ 新たな展開—新しい制度経済学への対抗と統合化に向けて—

1990 年代以降、AFEE の特徴のひとつとして、「ラディカル制度主義」(Radical Institutionalism) の表明がある。それは、AFEE の会長就任にも反映されているといえる。1997 年の AFEE 会長はウィリアム・M・ダッガー (William M. Dugger) であり、1998 年の AFEE 会長はジェームス・R・スタンフィールド (James R. Stanfield) である。さらに、1999 年の AFEE 会長にロニー・J・フィリップス (Ronnie J. Phillips) がそれぞれ連続して就任している。彼らは、ラディカル制度主義を主張する主要なアメリカ制度主義経済学者である。<sup>22</sup>

「ラディカル制度主義は、外見上、正統派への明確な主張を持った敵であり、マルクス主義の批判的な友人である。ラディカル制度主義 (のラディカル) は、ラディカル・マルクス主義のように、なくてもよい名称である。というのは、制度主義やマルクス主義は、本来、『ラディカル』である。にもかかわらず、その用語はあまねく用いられる。なぜなら、相当数の制度主義者たちは、彼らの研究の伝統のなかでラディカルという意味を見出してこなかったからである。」<sup>23</sup>

ダッガーやスタンフィールドなどのラディカル制度主義者が AFEE の中で中心的な役割になった理由のひとつとして、前述したコースやノース、そしてウィリアムソンなどの新しい制度経済学の登場によって、アメリカ制度主義経済学の独自性を表すひとつのキー・ワードと

19 AFIT の歴史に関しては、Sturgeon [17] に詳しく述べてある。

20 この 2 冊は、翌年の 1988 年、M. E. Sharpe 社から『進化経済学 第 1 巻：制度主義思想の基礎』と『進化経済学 第 2 巻：制度理論と政策』として、一般に販売された。Tool [19] および [20]

21 O'Hara [13]

22 彼等の他に、ウィリアム・T・ウォラー、Jr. (William T. Waller, Jr.) やダグラス・ブラウン (Douglass Brown) などがある。Dugger [3]

23 Dugger [3] p.4.

しての「制度」がその意味を失いつつあったことによる。

さらに、「制度主義」の前に「ラディカル」の形容詞をつけることで、アメリカ制度主義の伝統の中にあるラディカル制度主義者自身が、ノースなどの新しい制度経済学と自らの立場との違いを鮮明にしようとしたと考えられる。

さらに、「ラディカル」の用語の採用には、新しい制度経済学が「制度主義」を名乗るのにふさわしくないものである、というラディカル制度主義者による新しい制度経済学に対する批判の意味が込められている。すなわち、新しい制度経済学は「制度主義」という仮面をつけてはいるものの、その中身は新古典学派であり、独自の発展を遂げてきたアメリカ制度主義経済学の伝統とは全く異質なものである、という痛烈な批判が「ラディカル」の中に込められている。

事実、新しい制度経済学者のウィリアムソンが自らの階層的企業論の展開を「新制度主義」と述べたことに対して、ダグガーは次のような批判を加えている。

「この『新しい制度主義』は、制度主義者などではまったくない。その代わり、それは、よりいっそう現実的であり、また洗練された新古典主義である。」<sup>24</sup>

このように、新しい制度経済学の登場は、AFEEにおいてヴェブレン以後のアメリカ制度主義経済学のコア（核心）の部分をもより鮮明にするラディカル制度主義の登場を促したといえる。さらに、ラディカル制度主義者を含む一部のAFEEのメンバーは、ハワード・シャーマン（Howard Sherman）等のラディカル派政治経済学者（Radical Political Economist）との連携を模索している。<sup>25</sup>

もちろん、エアーズやJ・F・フォスターのアメリカ制度主義の伝統を受け継ぐトゥールやブッシュは、AFEEにおいて確固たる地位を確立している。<sup>26</sup> エアーズによって体系化された人間行動の二分法（dichotomy）は、アメリカ制度主義経済学の主要な方法論として確立するとともに、フォスター、トゥールそしてブッシュによって、その方法論に基づいた社会経済政策的意義が付け加えられた。

さらに、最近の動きとして、アメリカ制度主義経済学と新しい制度経済学との統合化を試みるAFEEメンバーが出てきている。<sup>27</sup> それは、制度を取引費用の軽減とみる新しい制度経済学の考えとヴェブレンの制度としての社会慣習やコモنزの法の経済分析といった制度論を組み合わせて、新たな統合化を目指すものである。

## V むすび

これまで、第2次世界大戦以後のアメリカ制度主義経済学の動向を、その学会組織であるAFEEから探ってきた。アメリカ制度主義経済学は、主流派経済学たる新古典派経済学への対抗と反主流を鮮明にするために、AFEEの設立に踏み切ったといえよう。

AFEEはその展開の過程で、アメリカ制度主義経済学と新古典派経済学との折衷を模索する時期を経て、アメリカ制度主義経済学の牙城としての地位を現在まで守ってきたといえる。

---

24 Dugger [4] p.95.

25 O'Hara [11]

26 Tool [18]

27 Groenewegen [7]

そこには、ヴェブレン以後のアメリカ制度主義の伝統を受け継ぐ多くの経済学者たちの活躍と彼等の制度主義理論の展開があった。

新しい制度経済学の登場や、さらにはオーストリア学派やレギュラシオン学派が「制度経済学」を主張している現在の状況の中で、今後、アメリカ制度主義経済学がその存在意義をどこに求めるのかが問われている。

これまで、ヴェブレン、コモンズ等の初期アメリカ制度主義者の成果を現代的な視点で再評価し、再構成する作業がAFEEによってなされてきたといえる。AFEEを取り巻く状況は、以前にまして複雑化している。AFEEがこれからどこに進むのかは、アメリカ制度主義経済学の存在意義と無関係ではない。AFEEの動向は、これからのアメリカ制度主義経済学の存在意義とその方向性を決定づけることになるだろう。

〔表1〕AFEEの歴代会長

年	会長名	年	会長名
1966	クラレンス・エアーズ〔初代〕	1967	ジョン・ギヤムズ
1968	アラン・グルーチャー	1969	ジョセフ・ドーフマン
1970	ベン・セリーグマン	1971	ダニエル・フスフェルド
1972	デイビット・ハミルトン	1973	ハリー・トレビング
1974	ウィラード・ミューラー	1975	セイモア・メルマン
1976	ウォレス・ペーターソン	1977	フィリップ・クライン
1978	デイビット・マーティン	1979	ダドレー・ディラード
1980	ジャック・バーバッシュ	1981	ウォルター・ニール
1982	ジェームス・ストリート	1983	ウェンデル・ゴードン
1984	デイビット・シュワルツ	1985	ミルトン・ロウアー
1986	アン・メイユー	1987	ディルムス・ジェームス
1988	エディス・ミラー	1989	ジョン・マンカー
1990	ポール・ブッシュ	1991	ジャエムス・スタージェオン
1992	マーク・トゥール	1993	ジョン・アダムス
1994	F・グレゴリー・ハイドン	1995	ヴェルノン・ブリッグス
1996	ジョン・グローネウエーゲン	1997	ウィリアム・ダグガー
1998	ジェームス・スタンフィールド	1999	ロニー・フィリップス
2000	イグヴェ・ラムスタッド	2001	ロドニー・ステイブンソン
2002	ジェームス・スワニー	2003	ジェームス・ピーチ
2004	ウィリアム・ウォラー	2005	チャールズ・クラーク
2006	ジェフリー・ホジソン	2007	グレン・アトキンソン
2008	マルコム・ラザフォード	2009	デル・チャンプリン

*The Journal of Economic Issues* Vol.1, No 1 & 2 から Vol.44, No 1 をもとに作成

## 【参考文献】

- [1] Adams, John, ed. (1980), *Institutional Economics : Essays in Honor of Allan G. Gruchy*, (Boston; Martinus Nijhoff Publishing)
- [2] Bush, Paul Dale (1991), "Reflections on the Twenty – Fifth Anniversary of AFEE : Philosophical and Methodological Issues in Institutional Economics", *The Journal of Economic Issues*, Vol.25, No.2, June.
- [3] Dugger, William M. (1989) ed., *Radical Institutionalism : Contemporary Voices*, (New York ; Greenwood



- Press)
- [4] Dugger, William M. (1995), *Underground Economics : A Decade of Institutional Dissent*, (Armonk ; M.E.Sharpe)
  - [5] Chavance, Bernard (2009), *Institutional Economics*, (London & New York ; Routledge)
  - [6] Gambs, John (1980), "Allan Gruchy and the Association for Evolutionary Economics", in Adams [1]
  - [7] Groenewegen, John, Spithoven, Antoon, and Annetle von den Berg (2010), *Institutional Economics : An Introduction*, (New York ; Palgrave Macmillan)
  - [8] Gruchy, Allan G. (1978), "Institutional Economics : Its Influence and Prospects", *The American Journal of Economics and Sociology*, Vol.37, No.3, July.
  - [9] Hodgson, Geoffrey M. (1999), "European Association for Evolutionary Political Economy (EAEPE)", in O'Hara [12]
  - [10] Lee, Frederic (2009), *A History of Heterodox Economics : Challenging the Mainstream in the Twentieth Century*, (London & New York ; Routledge)
  - [11] O'Hara, Phillip Anthony (1995), "The Association for Evolutionary Economics and the Union for Radical Political Economics : General Issues of Continuity and Integration", *The Journal of Economic Issues*, Vol.29, No.1, March.
  - [12] O'Hara, Phillip Anthony (1999), ed., *Encyclopedia of Political Economy*, Vols.2, (London & New York ; Routledge)
  - [13] O'Hara, Phillip Anthony (1999), "Association for Evolutionary Economics and Association for Institutional Thought", in O'Hara [11]
  - [14] O'Hara, Phillip Anthony (2000), *Marx, Veblen ,and Contemporary Institutional Political Economy : Principles and Unstable Dynamics of Capitalism*, (Cheltenham ; Edward Elgar)
  - [15] Ranson, Baldwin (1981), "AFEE or AFIT : Which Represents Institutional Economics?", *The Journal of Economic Issues*, Vol.15, No.2, June.
  - [16] Samuels, Warren J. (1982), "Editor's Report", *The Journal of Economic Issues*, Vol.16, No.1, March.
  - [17] Sturgeon, James I. (1981), "The History of the Association for Institutional Thought", *The Review of Institutional Thought*, Vol.1, December.
  - [18] Tool, Marc, and Bush, Paul Dale (2003), eds., *Institutional Analysis and Economic Policy*, (Boston ; Kluwer Academic Publishers)
  - [19] Tool, Marc R. (1988) ed., *Evolutionary Economics I : Foundation of Institutional Thought*, (Armonk ; M. E. Sharpe)
  - [20] Tool, Marc R. (1988) ed., *Evolutionary Economics II : Institutional Theory and Policy*, (Armonk ; M. E. Sharpe)
  - [21] *The Journal of Economic Issues*, Vol.1, No1&2, June (1967) to Vol.44, No.1, March, (2010).